Book Stories 2

ブック・ストーリーズ
本づくりのさきにあること――。

小樽市立病院は、2つの市立病院を統合・新築して、2014年12月に現病院が開院しました。2024年12月に開院10周年を迎えたことを記念して、『小樽市立病院ガイドブック　80人のドクターが語る身近な病気と対策』を発行しました。小樽市をはじめとする後志地域の医療の中核を担う同病院の専門医たちが、よくある症状に潜むさまざまな病気を解説するなど、一般的な記念誌や病院紹介冊子とは一線を画す"役に立つ"読み物に仕上げています。本書の企画・編集を主導した前小樽市立病院院長で小樽市病院事業管理者・病院局長の有村佳昭さんに制作意図やガイドブックに込めた思いを聞きました。

（文・写真／片山健一　取材日2025年3月11日・4月3日）

「誌上カンファレンス」でアドバイス

――症状別に考えられる病気を複数の医師が解説するというユニークなガイドブックを作った理由は。

専門家ではない方が、症状からインターネットなどで病気の情報を探して、「きっとこれだ」と見つけ出した病名は、私たち専門家からすると「どうしてそのような病気にかかったと思うのだろう」と首をかしげたくなるような的外れな希少疾患のケースがあります。一般の方が情報に振り回され、勝手に判断することは非常に危険なので、分かりやすく実用的な書籍を作ろうと考えました。

腹痛、腰痛、頭痛といった痛みの症状から考えられる病気について、当院各科の医師たちが「誌上カンファレンス」を行う形で、頻度の高い疾患と治療法などを解説しています。一つの症状について専門家が寄り集まって書いている書籍を見かけたことがないので、編集会議で提案しました。

また、身近な「かかりつけ医」を持ってもらうため、後志管内の病院やクリニックの所在地と電話番号、診療科目を地図に落とし込んだ「おたる・しりべし健康地図」を付録として作製したほか、管内の開業医向けに、地域医療支援病院である当院の専門外来や紹介していただきたい疾患などについても詳細に示しています。

『新病院開院10周年記念【保存版】
小樽市立病院ガイドブック
80人のドクターが語る
身近な病気と対策』

発行の目的などを語る有村病院局長

【編著者】小樽市立病院
編集／病院広報著書製作委員会委員長
有村　佳昭さん

CHECK

〖書籍概要〗

小樽市立病院の歩みや役割を示すインタビューと、診療科・部門の紹介、地域医療を支えた新型コロナウイルス感染症への対応、災害医療に貢献するDMAT（災害派遣医療チーム）の活動のほか、院内の専門医が症状に潜む病気について解説する「よくある病気と心配事」などで構成する。A4判、160頁、オールカラー、ソフトカバー、2025年4月 共同文化社発行。価格：1,320円（税込）。ISBN：978-4-87739-421-9。

〖本書お問い合わせ・ご購入先〗

株式会社 共同文化社　札幌市中央区北3条東5丁目
電話 011-251-8078　FAX 011-232-8228　URL https://www.kyodo-bunkasha.net/
道内書店をはじめ、Amazon、共同文化社サイトなどから購入いただけます。

コロナ禍の教訓や災害医療の役割を伝える

――2つのトピックスとして、新型コロナウイルスのパンデミックを振り返り、DMATの活躍を取り上げています。

コロナに関しては、2021年4月から院長に就任した私が、責任者として経験したことを書き記したいという思いがありました。例えば、市内の学校で多数の学級閉鎖があり、そこに通う子を持つ病院職員が全て欠勤すると、たちまち医療が逼迫します。そこで、子どものPCR検査を当院で行い、陰性であれば、職員が出勤できる当院独自のルールを作成し、人員を確保しました。未曽有の事態に対峙し、正解のない問題を走りながら考え続けたことで得られた教訓をまとめました。

「小樽市立病院DMAT」については、大規模災害が頻発する中、その重要性が高まっており、実際に2018年9月の北海道胆振東部地震では大規模停電の中、小樽市内の医療活動維持のための態勢整備、2024年1月の能登半島地震では現地へ派遣され、石川県七尾市で高齢者施設入所者の健康管理などを担いました。当院は災害拠点病院でもあるため、管内に泊原発が所在することを念頭に今後は原子力災害を想定した訓練にも取り組もうと考えています。このように重要な取り組みである当院DMATの役割や活動状況を伝えようと取り上げました。

2024年4月に小樽・後志地域で初の「地域医療支援病院」に承認され、12月に開院10周年を迎えたことを機に、当院がどんな病院であるかを広く伝え、また地域住民の皆さんに親しみを持ってほしいという思いから、職員の総力を挙げて本書を完成させました。

誌上カンファレンスのページでは、小樽市立病院の現役専門医たちが、「よくあるいたみ・なやみ」に隠れているかもしれない107の病気を解説しています。「しつこい頭痛の原因はカビによる副鼻腔炎だった」、「腰と背中が痛くて湿布を貼っていたけど実は虫垂炎だった」など、リアルなエピソードを交えながら診断や治療について説明しています。

選ばれる病院であり続けるために

――これから小樽市立病院をどのように運営していきたいですか。

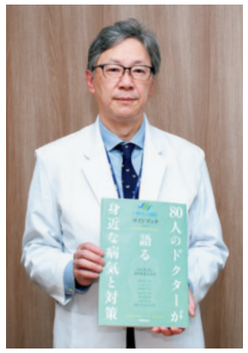
私は、夕張市出身で、札幌医科大学医学部に入学しました。卒業後は大学院へと進み、約20年にわたり炎症性腸疾患の再生医療の研究を続けてきました。

10年ほど前、札幌医科大学附属病院の元病院長、前麻酔科学講座教授で当時の小樽市事業管理者・病院局長並木昭義先生と札幌医科大学OBの小樽市立病院長近藤吉宏先生が大学に訪ねてきて、臨床経験の乏しい私を小樽市立病院に誘ってくださいました。見学すると、活気があって、真新しい病院を一目で気に入りました。

本書は、新病院開院10周年の記念事業として企画したものですが、4期16年にわたり病院局長を務められ、この春に退任された並木先生が、かねてより地域住民への還元と病院職員への教育のための本を作りたいと希望していたため、花道を飾るものにしたいという思いもありました。

札幌から近く、観光地としての魅力も備えた小樽にあり、新しい設備の整った当院は、若い医療関係者にも人気が高く、特に研修医からの希望倍率は札幌の病院に負けないほどです。

これからも患者さんや働き手にも選ばれる病院であり続けるためには、さまざまな活動や教育体制を充実させて、魅力を高めていく必要があります。当院がどんな医療を提供しているのかを広報し、在籍する医師一人ひとりに親近感を持ってもらうことも大事だと思います。その一つのツールとして、本書が役に立てばと思っています。



表紙をめくると、特別付録の「おたる・しりべし健康地図」が収納された薬袋が目を惹きます。身近な医療機関が一目で分かるので、かかりつけ医を探すのに役立ちます。